

阿弥陀堂の内陣本間など、一部には、畳師が手縫いで作り上げる伝統技術の「有職畳」といわれる畳が用いられており、縁の仕上げには熟練の技術を要します。

また、御影堂、阿弥陀堂の外陣・参詣席の畳縁には、東本願寺固有の紋が使用されています。これは、高麗小紋から派生したものと考えられ、東本願寺の中では豆小紋と呼んでいます。畳縁の縫い付け作業では、紋を一定に合わせ、畳を敷いた際に整然と見えるよう、配慮がなされます。



畳を裏返し、肘を使って力強く表を縫い付けていきます

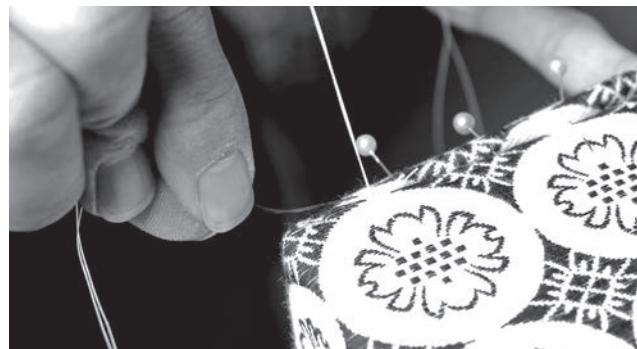
夏は湿度を吸収するなど、機能性にも優れています。畳のみならず、土壁や障子の和紙など、日本間(和室)に用いられる建材は日本の風土に適した、心地よい知恵が息づいています。

真宗本廟には、年間数万人の参拝者や観光客の方々が訪れるため、両堂の参詣席の畳は約三十年ごとに修復されますが、傷みが目立つものについては日常的な営繕のなかでそのつど修復がなされています。

これら畳工事にわたる工程に

現在、重要文化財に指定されている建造物の畳には必ず、伝統的な藁だけで作られた畳床を用いることが決められています。藁床は通気性に優れ、弾力に弾むため、正座時の足の痛みを軽減してくれ、また藁の層が空気を含むため冬は暖かく、夏は湿度を吸収するなど、機能性にも優れています。畳のみならず、土壁や障子の和紙など、日本間(和室)に用いられる建材は日本の風土に適した、心地よい知恵が息づいています。

真宗本廟には、年間数万人の参拝者や観光客の方々が訪れるため、両堂の参詣席の畳は約三十年ごとに修復されますが、傷みが目立つものについては日常的な営繕のなかでそのつど修復がなされています。



四方を縫い付けたら、重なりあった縁を整えます



畳作りに用いられる道具類

は、細部にわたる緻密な作業が求められ、専門業者の職人の方々は、ひと縫いひと縫い丁寧な作業をいただいております。阿弥陀堂の畳工事に携わる職人の方からは、「真宗本廟をはじめとして京都には、まだまだ日本が誇るべき畳文化を継承する素地があります。このたびの御修復に携わり、この経験を活かして、技術、文化、願いをしっかりと次代に引き継いでいきたい」とのお言葉をいただきました。

御修復後の阿弥陀堂の畳は、縁がその輪郭をびたりとあわせ、心地よい、い草の香りとともに参拝者を迎えてくれるでしょう。

※これまでは四〇一枚とされていましたが、今回の修復調査時において、内陣の一部と外陣の畳寸法が旧来より小さくなっていることが判明したため、畳の枚数が増えました。



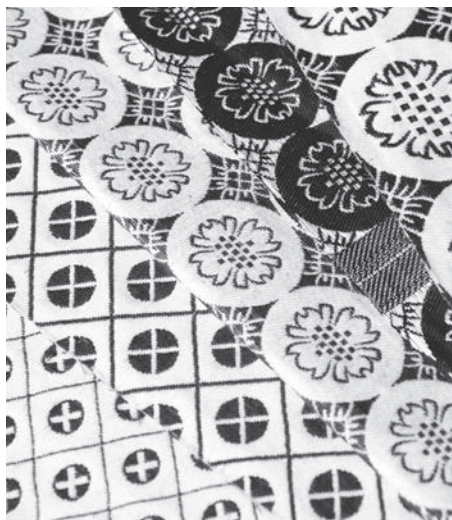
# 御修復のあゆみ

く 伝承された先達の願い

## 阿弥陀堂の「畳」

阿弥陀堂は、内陣・外陣・参詣席に分かれ、四一八枚\*もの畳敷が施されています。

阿弥陀堂の畳は、参詣席・外陣においては二十五年ほど前に一部を新調したため、畳表に部分的な補修が必要でしたが、その他の畳すべては畳表が劣化し、耐



本堂で用いられる紋縁の大きさが大きくなるほど上間に用いられます(左から豆小紋、高麗小紋、中紋白、中紋黒、大紋白)



い草の畳表に、予め紋縁を縫いつける作業



紋縁を付け終わったら、床に表を張ります

用の限界に達していました。このため、このたびの御修復においては、「畳工事」として、全般にわたる修復することになりました。修復方針としては、内陣の一部においては、畳の芯にあたる畳床をそのまま使用し、い草の茎を乾燥させて織った藁座(畳表)

の部分を取り替える「表替え」を行うというものです。また、参詣席・外陣等の畳表については、「裏返し」という作業を行うことになりました。この「裏返し」とは、畳表は表と裏の両面を使用することができると、表側が傷めば裏側がきれいなうちに裏返して張り替えるという工夫です。

また、畳床には、損傷の程度により藁の差込み等を行い、隣の畳との隙間や不陸(段差)があれば、補正しながら修復がなされました。そして、藁座の部分を止める装飾である畳縁の縫い付け作業です。